

遷延性・慢性咳嗽患者のFスケール問診票による逆流性食道炎 症状の検討

石川県立中央病院 呼吸器内科 西 耕一、黒川浩司、原 丈介、出村芳樹
金沢大学附属病院 呼吸器内科 藤村政樹

【目的】逆流性食道炎 (GERD) は咳嗽の原因となると同時に咳嗽で誘発・増悪することも報告されている。そこで、治療前の遷延性・慢性咳嗽患者のGERD症状の有無、咳嗽治療後の変化の有無を、Fスケールを用いて検討した。

【方法】2006年11月から2008年3月までに3週間以上継続する咳嗽を主訴として受診し、治療前後でFスケールの評価が行えた26名を対象とした。Fスケールで8点以上をFスケール陽性、治療前後で2点以上減少した場合を改善、2点以上増加した場合を悪化、その他を不変とした。

【成績】26例中11例がFスケール陽性でGERD症状を認めた (42.3%)。11例の原因疾患は、咳喘息(CVA)8例、アトピー咳嗽(AC)1例、副鼻腔気管支症候群(SBS)1例、CVA+GERD1例であった。Fスケール陽性11例中9例で咳嗽改善後のFスケールを評価することが可能であり、9例のFスケールは平均10.9点から8.3点と有意に低下した ($p<0.05$)。しかし、9例中、GERDに対する治療薬が投与されたのは、CVA+GERDの1例のみであり、その他の8例では行われなかった。

【結論】遷延性・慢性咳嗽患者の約40%にGERD症状が認められたが、その多くは咳嗽発現に関連して生じており、咳嗽治療の奏功とともに改善することが多いことが示唆された。